

修士論文（要旨）
2012年7月

介護施設入所の認知症高齢者に対する美容ケア施術の効果

指導 長田久雄 教授

老年学研究科
老年学専攻
208J6903
金銀玉

目 次

I. はじめに	1
II. 研究の背景	1
1. 認知症高齢者の現状	2
2. 美容ケアの意味とその現状	2
III. 目的	3
IV. 方法	3
1. 対象	4
2. 期間	4
3. 調査方法	4
4. 分析方法	6
5. 倫理的配慮	6
V. 結果	6
1. 7項目の状態観察について「介入前」と「介入後1回目」短期的変化と 「介入前」と「介入後24回目」長期的変化それぞれを比較	6
2. 24週間を通し得られた7項目の状態観察結果から、被験者一人ひとり の個別的変化について	7
VI. 考察	9
1. 7項目の状態観察について「介入前」と「介入後1回目」短期的変化と 「介入前」と「介入後24回目」長期的変化それぞれを比較	9
2. 24週間を通し得られた7項目の状態観察結果から、被験者一人ひとり の個別的変化について	10
VII. まとめ	13
VIII. おわりに	14
引用文献・資料	

【目的】 心理的、生理的効果が得られる美容ケアとして、「触れる」ことを重視したエステティックマッサージを本研究では取り入れることとした。高齢者施設や病院におけるマッサージの先行研究はあるものの、回数が限定されているものや短期間での効果をみるものがほとんどである。マッサージが認知症高齢者の不安を軽減し、安定した生活に導く手段となりうることが明らかとなることにより、日常ケアとして美容ケアは必要であると職員に認識されるのではないかと考えられる。そして、日常ケアとして取り入れることにより、職員の介護負担の軽減の施策の一助となるのではないかと考えられる。よって、本研究では、エステティックマッサージを行い、介入後の認知症高齢者の「表情」や「笑顔」、「感情」、「会話」、「介護への抵抗」、「行動の落ち着き」、「活気」、これら7項目の状態を観察し、介入前と介入後の変化を明らかにする。また、24週間を通し得られた7項目の状態観察結果から、被験者一人ひとりの個別的变化を明らかにする。この2点を研究目的とする。

【方法】 対象は、首都圏の特別養護老人ホーム・N園（定員207名）に入所する認知症専門フロアの利用者15名を対象とした。対象の性別や年齢、要介護度、認知症高齢者の日常生活自立度、認知症におけるタイプと施設入所日、家族構成、生活歴、認知と行動、課題についてプロフィール表に示した。性別は男性2名、女性13名で、年齢は64歳から99歳で平均年齢 82.5 ± 9.9 歳であった。年齢構成は、60歳代が2名、70歳代が2名、80歳代が8名、90歳代が3名であった。認知症のタイプは、アルツハイマー型認知症11名、若年性アルツハイマー病1名、タイプ不明の認知症3名であった。要介護度による分類は、要介護度2が1名、要介護度3が9名、要介護度4が4名、要介護度5が1名であった。認知症高齢者の日常生活自立度の分類は、IIbが4名、IIIaが5名、IIIbが3名、IVが3名であった。期間は、2008年6月24日から12月17日までで、うち6月24日は、ハンドマッサージケアを実施介入せず、観察のみをおこなった（以下、介入前と記述）。7月2日より12月17日まで毎週1回、水曜日、合計24回ハンドマッサージケアを実施介入した（以下、介入後と記述）。

【結果】 7項目の状態観察について、「介入前」と「介入後1回目」の介入の短期的変化と、「介入前」と「介入後24回目」の介入の長期的変化それぞれを比較した。「介入前」と「介入後1回目」、「介入前」と「介入後24回目」の7項目の状態観察結果における平均の相違を検定するために、対応のあるt検定を行った。「介入前」と「介入後1回目」との比較では、「表情」、「笑顔」、「会話」、「介護への抵抗」、「行動の落ち着き」、「活気」の6項目において、「介入前」と「介入後1回目」では、平均に有意差はみられなかった。しかし、「感情」（ $t(13) = -2.48, p < .05$ ）の項目において、「介入前」と「介入後1回目」では平均に有意差がみられ、「介入前」に比べ「介入後1回目」の施術により有意な得点の上昇がみられた。「介入前」と「介入後24回目」の状態観察結果の比較では、「表情」、「笑顔」、「感情」、「会話」、「活気」の5項目において、「介入前」と「介入後24回目」では、平均に有意差はみられなかった。しかし、「介護への抵抗」（ $t(13) = 8.25, p < .001$ ）と「行動の落ち着き」（ $t(13) = 2.46, p < .05$ ）項目において、「介入前」と「介入後24回目」では平均に有意差がみられた。「介入前」に比べ「介入後24回目」の施術により「介護への抵抗」では有意な得点の低下がみられた。「行動の落ち着き」においても有意な得点の低下がみられた。そして、これらの短期的・長期的変化を一人ひとりより細かく個別的にみるために、被験者15名の24週間の状態観察結果をグラフ

にし、そのグラフが示す得点の変化をまとめ、それぞれのプロフィールとの兼ね合いをみた。その結果、被験者は、介入後8回目から15回目といった介入中間回前までは得点の上昇や低下がみられたが、中間回以降より「ふつう」の状態を維持する傾向にあった。状態観察7項目のうち、「介護への抵抗」と「行動の落ち着き」においては、介入前から介入後中間回（8回目～15回目）ごろまでは、介護への抵抗はない状態、また行動の落ち着きは安定した状態であったが、中間回以降から低下し、「ふつう」の状態を保持していた。このことから、マッサージ介入は、短期的には変化がみられるが、長期的には変化がほとんど見られず状態は「ふつう」を維持することが示された。しかし、15名の被験者のうち、2名は24週間の介入を通し、安定的な変化はみられなかった。変化がみられない被験者は、BさんとOさんであった。

【考察】7項目の状態観察のうち、短期的変化として「感情」項目にのみ施術により有意な得点の上昇がみられた。認知症高齢者にとりマッサージによる心地よさから、不安の軽減や安心感、リラクゼーション効果が得られたのではないかと考えられる。施設に入所される高齢者にとり、皮膚を介して他者と関わり、非言語的コミュニケーションを交えながら手のぬくもりを感じることは、精神を安定し、感情を活性化することが示されたものと考えられる。長期的変化として、施術により「介護への抵抗」と「行動の落ち着き」では有意な得点の低下がみられた。「介護への抵抗」は、マッサージにより新陳代謝を促し、活動性が増したことによるものと考えられる。マッサージ効果が被験者の心理状態を落ち着かせ、介護に対する抵抗感の意思表示を表出する行動であったと推測する。また「行動の落ち着き」が低下したことに関して、マッサージのリフレッシュ効果から被験者の行動を活性化に導いたのではないかと推測される。これらの短期的・長期的変化を一人ひとりより細かく個別的にみるために、被験者15名の24週間の状態観察結果をグラフにし、そのグラフが示す得点の変化をまとめ、それぞれのプロフィールとの兼ね合いをみた。その結果、被験者は、介入後8回目から15回目といった介入中間回前までは得点の上昇や低下がみられたが、中間回以降より「ふつう」の状態を維持する傾向にあった。状態観察7項目のうち、「介護への抵抗」と「行動の落ち着き」においては、介入前から介入後中間回（8回目～15回目）ごろまでは、介護への抵抗はない状態、また行動の落ち着きは安定した状態であったが、中間回以降から低下し、「ふつう」の状態を保持していた。このことから、マッサージ介入は、短期的には変化がみられるが、長期的には変化がほとんど見られず状態は「ふつう」を維持することが示された。しかし、15名の被験者のうち、2名は24週間の介入を通し、安定的な変化はみられなかった。Bさんの日頃の行動や介護課題では、精神的不安定と介護への抵抗があり、機嫌が悪い時には、職員の介助に対し拒否反応を示すことが問題視されていた。また15名中99歳と最高齢であった。このことから、日頃の精神的不安定や介護への抵抗、介助への拒否行動、最高齢であることなどから、長期的で習慣的な美容ケアがBさんにとり心理的・生理的に負担となっていたのではないかと推測される。一方、Oさんは、日頃より、躁と鬱の状態があり、不穏状態が続くと、介助や声かけに対し拒否的になり、職員に暴言や暴力行為がみられることが問題視されている。このことから、精神的不安定があり、介護への抵抗が日頃からあることにより、マッサージといった行為の理解や施術者との関係構築が不十分の状態でのケアとなり、心理的・生理的安定に導くことができなかったのではないかと考えられる。

引用文献

- 1) 厚生統計協会：高齢者福祉, 国民の福祉の動向, 厚生指標, 5(1) : 112-127, 2011.
- 2) 伊波和恵, 浜治世：老年期痴呆症者における情動活性化の試み；化粧品において, 健康心理研究, 6 : 29-38, 1993.
- 3) Lohas Medical. 認知症の真実, 10 (7) , 3-7, 2006.
- 4) 日本赤十字内在宅ケア研究会. 単身高齢女性の健康・生きがい増進のためのソーシャルサポートネットワーク形成に関する研究, 29-39, 2004.
- 5) 余語真夫, 浜治世ら：女性の精神的健康に与える化粧の効用, 健康心理研究, 3, 28-32, 1990.
- 6) 松井豊, 山本真理子ら：化粧の心理的効用, マーケティング・リサーチ, 21, 30-41, 1983.
- 7) 永尾松夫：女性における化粧意識, 化粧文化, 8, 133-144, 1983.
- 8) 菅原健介, 岩男寿美子ら：化粧の心理的効用IV, 自己呈示としての化粧行動, 日本社会心理学会 26 回大会発表論文集, 106-107, 1985.
- 9) 厚生労働省老健局：2015 年の高齢者介護, 高齢者介護研究会報告書, 2003.
www.mhlw.go.jp/topics/kaigo/kentou/15kourei/index.html
- 10) 阿部恒之：化粧行為の理解と研究の概観, ストレスと化粧の社会心理学, 33-58, 2002.
- 11) 阿部恒之：マッサージによって変わる心とからだ, 化粧心理学, 7-19, 1993.
- 12) 湯浅正治：エステティックマッサージによる化粧の安らぎ効果, *Fragrance Journal*, 64, 42-43, 1984.
- 13) 阿部恒之, 鈴木ゆかりら：エステティックフェーシャルマッサージの心理生理学的研究—リラクセーション効果の検証, *Journal of SCCJ*, 22(4), 236-244, 1989.
- 14) 阿部恒之：エステティックの心理学的効果および東医学との関連について, *Fragrance Journal Special Issue*, 10, 19-26, 1990.
- 15) 浅井泉, 浜治世：顔面マッサージの心理学的効果に関する実験的研究, 日本心理学会第 55 回大会発表論文集, 422, 1991.
- 16) 畑山俊輝, 山田嘉明ら：美粧行為の心理的効果に関する研究, (3) 脈拍指標の結果とまとめ, 日本心理学会第 50 回大会発表論文集, 306, 1986.
- 17) Yamada, Y. Hatayama, T. Hirata, T. :A psychological effect of facial estherapy. *Tohoku psychological Folia*, 45, 6-16, 1986.
- 18) 平田忠, 阿部恒之ら：美粧行為の心理的効果に関する研究, (1) 問題・一般的方法と行観察の結果, 日本心理学会第 50 回大会発表論文集, 304, 1986.
- 19) 互惠子, 岡崎晴子：エステティックシステムの生理心理的効果, 事例研究, 資生堂ビューティーサイエンス研究所 (編) 化粧心理学, 化粧と心のサイエンス, フレグランスジャーナル社, 24-32, 1993.
- 20) 阿部恒之：エステティックとボディケア, 身体意識からの解釈, フレグランスジャーナル社, 24, 8, 68-74, 1996.
- 21) 阿部恒之：エステティックの心理・生理的効果, 課題と展望, クレアボー, 5, 22-27, 1996.

